

星空案内人(星のソムリエ[®])制度 Tips

柴田晋平

(特定非営利活動法人星のソムリエ機構)

2024年3月10日 (No. 5)¹

¹MyReference doc/uguide/ug.tex (誤字、表現の微修正 2024.9.13)

まえがき (その1)

星空案内人 (星のソムリエ[®]) 資格認定制度に基づいて講座を開講し資格認定を行っている団体 (以下、「実施団体」) に向けてその具体的な制度の実施・運用方法の解説と関係資料を掲載した「スタートアップガイド」という冊子が2008年に発行されています。その中に「星空案内人 (星のソムリエ) 資格認定制度概要とその運営」という文章がありこれが実施団体が制度を実施する時のよいガイドになっています (以降、「初版」ということにします)¹。

初版は、制度ができた直後に書かれたものです。創設の精神が語られていて非常に参考になる文書ではありますが、全国で実施してみた経験や成果がまだわからない時に書かれています。幸い制度設計はうまくできており、ほとんど変更なしに10年間順調に運営され、たくさんの団体がこの制度を利用し、たくさんの星空案内人 (星のソムリエ) が活躍しています。従いまして初版はいまも非常に役に立つ指針を与えてくれます。

一方、10年あまり制度を利用して、実施上重要なノウハウがたくさん集積されてきました。全国の実施団体の皆さんが様々な方法をとられているかを相互に知る機会はありません。年に一度の全国シンポジウムは非常に重要な機会です。それでも制度の実施・運用の立ち上った話が十分にできるわけではありません。そこで、一番たくさん情報を持っている星空案内人資格認定制度運営機構 (以降、「機構」と呼ぶことにします) が制度運営の知恵を集めてひとつのガイドブックにすることで実施団体のみなさんが随分と楽なものでないかと思われます。そこで、ガイドブックの第二版として「星空案内人 (星のソムリエ) 資格認定制度概要とその実施・運用」と題するこの文章を作成しました。

(2018年6月30日執筆開始し、現在書き溜めているものです。)

¹ 星空案内人制度のホームページの資料のコーナーにあります。また運営ということが使われていますが、正しくは運用です。

まえがき (その 2)

私事ではありますが、ことし (2020 年) 3 月に大学を定年退職し、この機会に、星空案内人制度のスタートアップガイドの改定や実施団体の実務の便利帳のようなものを書こうと思いました。4、5 月は退職関係の手続き的なことや COVID-19 への対応などがあり落ち着いた時間がとれませんでした。最近執筆を開始しました。ところが今の調子でいくと完成までにはかなり時間がかかりそうですし、一方では、現実はいまぐろしく変化しています：COVID-19 によるパンデミック、新規団体の申請、実施団体からの問い合わせ、受講生からの苦情など、執筆に時間をかけることもできなという焦りも出てきました。

それで、完成したものリリースするのではなく、部分的に書いたものを Tips として少しずつリリースし、最後にたくさんの Tips をまとめて完成とした方が現実的だと思うに至りました。そこで今後このシリーズを順次書いていくことにしたいとおもいます。全国の実施団体の皆様、これからこの制度を利用したい皆様、そして全国の星空案内人の皆様、どうぞこの Tips シリーズをご利用ください。

2020 年 9 月 1 日

日本天文学会天文教育普及賞について

柴田 晋平

日本天文学会から天文教育普及賞をいただけることになりました(2021年3月15日「星のソムリエ」制度の創設と人材育成循環による天文普及への貢献²)。

星空案内人(星のソムリエ®)を通した天文普及に対してですので、これは、私(柴田)個人よりも、全国の星空案内人の皆さんや講座を開いている実施団体の皆さん、制度運営機構の皆さんの活動に与えられたものと思います。皆さんに心から感謝いたしますとともに、皆さんと一緒に喜びたいと思います。

星空案内を通して、星空や宇宙に親しみ、日々の生活を豊かにする活動ができていると思います。天文学のサイエンスの部分と星空に関連した文化的な部分と観察スキルをバランスをとって身につけることができることは大変な幸せです。また、それを隣人に伝えることで共感でき学び合える幸せがあります。このハッピー二乗の法則に気がついたことは大きな成果でした。

これからも、星空案内の活動にエネルギーを注入していきます。また、皆様と一緒に活動が続けたいと思います。

ここに、ご報告と御礼を申し上げます。

2021年3月15日

²<https://www.asj.or.jp/jp/activities/prize/kyoiku/recipients/>

リリース記録

No.5:	2024.3.10
付録:	制度導入を検討されている団体/個人への導入説明資料
No.4:	2021.3.15
まえがき追加:	日本天文学会天文教育普及賞の御礼
No.3:	2020.10.12
第1章	準案内人と二団ロケット方式
第2章	講座がうまくいっているかのモニター
No.2:	2020.09.19
第1章	制度の実施団体の条件
第2章	キット望遠鏡の使い方
過去	
No.1:	2020.09.01
第1章	星空案内人(星のソムリエ)モデル
第2章	講座運営の典型パターン
第3章	星のソムリエとは?と聞かれた時

用語・略語

機構 星空案内人資格認定制度運営機構。2023 年 7 月 7 日以降は特定非営利活動法人星のソムリエ機構。星空案内人資格認定制度の運営主体である。

星のソムリエ 星空案内人の愛称として命名。今後はブランド名として特に大事にしていきたい用語と考えています。

実施団体 機構の承認を得て、星空案内人資格認定制度に基づいて星空案内人の資格を発行することができる団体または個人。

目次

まえがき (その 2)	2
まえがき (その 2)	3
第 1 章 モデル	11
1.1 星空案内人 (星のソムリエ) モデル	12
1.1.1 はじめに	12
1.1.2 星空案内人 (星のソムリエ) モデル	12
1.2 制度の実施団体の条件	15
1.2.1 星空案内人は普通の資格認定制度とは異なる	15
1.2.2 一般的な資格・検定制度の場合	15
1.2.3 星空案内人資格認定制度の場合	17
1.2.4 実施団体の制度利用の方針	18
1.2.5 実施団体になれない状況	18
1.2.6 実施団体の苦勞	19
1.2.7 ふろく：実施団体のいろいろな形態	22
1.3 準案内人と二段ロケット方式	30
1.3.1 準案内人誕生の歴史	30
1.3.2 二段ロケット方式の誕生	32
1.3.3 準案内人の魔法	34
1.4 コラム：厚切りジェイソンの英語勉強法	35
第 2 章 講座運営	37
2.1 講座運営の典型パターン	38

2.1.1	準案内人資格取得まで: 星空案内人 (星のソムリエ)	
	講座	38
2.1.2	講義科目の単位認定	39
2.1.3	準案内人の認定	40
2.1.4	準案内人から案内人へ	41
2.1.5	実技科目の単位認定	41
2.1.6	資格取得後	43
2.2	キット望遠鏡の使い方	44
2.2.1	工作キットの望遠鏡で「望遠鏡を使ってみよう」の 単位認定はできるか	44
2.2.2	星空案内人の資格をキット望遠鏡を使った星空案内 で取得	44
2.2.3	望遠鏡の仕組みを知る	45
2.3	講座がうまくいっているかのモニター	46
2.3.1	講義の状態のモニター	46
2.3.2	講座全体の状態のモニター	49
第 3 章	星のソムリエ活動	51
3.1	星のソムリエとは?と聞かれたとき	52
第 4 章	実務マニュアル	57
4.1	募集要項の作り方	58
4.1.1	講座内容とキャッチコピー	58
4.1.2	開講日時	60
4.1.3	申込期間	61
4.1.4	受講資格	62
4.1.5	定員	63
4.1.6	会場	63
4.1.7	受講費用	64
4.1.8	申し込み方法 結果通知	64

4.1.9	当日までの準備など	64
4.1.10	問い合わせ窓口	64
4.2	PR について	65
4.2.1	簡単な数値モデル	65
4.3	商標「星のソムリエ」の使い方	66
4.3.1	実施団体の皆様へ	66
4.4	問題発生！あるある：対策	68
4.4.1	望遠鏡の台数が足りない	68
付 録 A ふろく		71
A.1	星のソムリエを育てたい	72
A.1.1	前提となる条件	73
A.1.2	基礎資料	73
A.1.3	重要な概念など	74

第1章 モデル

1.1 星空案内人 (星のソムリエ) モデル

1.1.1 はじめに

星空案内人資格認定制度がスタートしたのは 2003 年 (@やまがた天文台)、全国制度となったのが 2007 年のことです。その後、この制度は「星のソムリエ」の愛称とともに普及し、すっかり定着した感があります。今日は、星空案内人 (星のソムリエ) 資格認定という制度や、星空案内人の活動がどうしてこれまで盛んになったかという理由を考えたいと思います。(創設した私自身も初めの頃はなぜうまくいっているのかははっきりとした理由がわかりませんでした。) その理由を知ることが、制度を利用して成功するためのコツを知ることになると思うのです。これは、実際に星のソムリエの講座を運営しているスタッフの運営のヒントになるでしょう。

また、これから制度の導入をしたいと考えている皆様には導入の意図 (思惑) とこの制度の働きが一致するかどうかの判断にも使えます。たとえば、観光での町おこし村おこし (観光立国) といった最近のトレンドの中で、星を観光資源と考えることがあるかもしれません。もし、その事業のなかで星空案内人資格認定制度を利用したければ、制度が機能する仕組みをよく理解した上で戦略を練る必要があるでしょう。単に資格制度で資格を持った人を増やそうとしても目的は達成できるものではありません。

1.1.2 星空案内人 (星のソムリエ) モデル

ここ 17 年ほどの歴史を顧みて、星空案内人 (星のソムリエ) 資格認定制度の働き・仕組み (機能モデル) を私の理解した範囲で述べたいと思います。

星空案内人制度を導入すると、制度の実施団体 (現在 41 団体) では、まず、資格認定につながる講座を開講します。星空・宇宙が好き、あるいは興味のある人が集まってきて、まず、(1) 講座では基本的なことを学びます (楽しい!)。次に講座が終わると、(2) 実技練習、案内の実際の練習

などで実際の星空観察や観望会など様々な体験をします。それらの場では (3) 受講生は、主催者 (実施団体) のスタッフ・講師、過去の講座の卒業生などのサポートをいただきながら学びます。

このような流れの中に二つの重要な働き (function) があります。

一つ目の働きが「ハッピー二乗の法則」と呼んでいるものです。宇宙や星空、星の関わる文化などに興味のある人が講座で学ぶことは大きな喜びです。(もちろん、そのように講座のカリキュラムが組み立てられています。) これが一つ目のハッピーです。一つ目のハッピーでおしまい：つまり、講座を受けて (時には資格をもらって)、解散、というのがよくあるパターンです。星空案内人制度は、講座で学んでそれでおしまいではありません。次に、学んだことを星空案内という場で人に伝えようとします。すると、星空案内をしてもらった皆さんが大喜びで、その喜んでいただけたことを見て (体験して) ハッピーを感じることができます。これが二度目のハッピーです。これがあると、また、学んで、また、伝えたくくなります。このプラスの循環が巨大な力を生み出すのです。これを**ハッピー二乗の法則**と言います。「学んでハッピー、伝えてハッピー」という標語にまとめられます。

「伝えてハッピー」の場は観望会のようなしっかりとした場とは限りません。仕事帰りに「あの明るい星が金星だよ」と隣人に教えてあげると言った日常的なものでも「伝えてハッピー」の瞬間がやってきます。多くの受講生が、二千元程度の組み立キットの小型望遠鏡を街中に持ち出して、月のクレータを見て喜んでいただいたときの嬉しかったことを、満面の笑みを浮かべて語ります。

二つ目の働きは、「宇宙人の帰巢本能」と関係しています。「宇宙人の帰巢本能」は私の造語なので何のことやら？という感じだと思いますので説明します。多くの受講生は、星空が好きだったり、宇宙に対して興味があっても、周りの人に星空や宇宙話題を投げかけたり、語り合ったりする機会がないことに苦しんでいます。星空や宇宙に何かしら惹かれる人は少なくはないと思います。これを「**宇宙人の帰巢本能**」と呼ぶことに

します。日常生活の多忙さの中にも、この宇宙人の帰巢本能を忘れないで、星空・宇宙に興味をもって勉強したい・会話したいと強く思う人はそう多くはありません。しかし、そう思う人たちには話し相手がいなのです。思い切って星空案内人の講座を受講したり、実施団体の活動に参加すると、星空・宇宙のことがいっぱい話せてびっくりし、共感できてまたびっくり、感激することとなります。星空案内人の受講生に感想を聞くとほとんどの人が「星空・宇宙の話題で会話をしても大丈夫な人/会話が弾む人と出会えたことが最高の幸せ!」と言います。

星空案内人制度がうまく機能している星空案内人講座では、「ハッピー二乗の法則」がうまく働き、みんなが「宇宙人の帰巢本能」を満たして幸せを感じています。この二つの機能がうまく働いているとその講座の実施団体は仲間が増え、受講生・卒業生の満足度も高くなります。

このことがわかっていると実施の方針が立ちます：

- (1) 講座開講、資格授与だけでは不足。資格で誘惑してもうまくいかない。
- (2) 実施団体、講座スタッフ、受講生の交流システムが形成されている必要がある。
- (3) 実技を一緒にやる時間がたっぷりある。
- (4) 星空案内をたくさん経験できる環境が必要。
- (5) 一人ひとりの個性が大切なので、自由に羽ばたくことのできる雰囲気が必要。(押し付けるようなことがないように)
- (6) 当然ですが、講座の授業は楽しいものが提供されている必要があります。

ver.2020.9.1

1.2 制度の実施団体の条件

1.2.1 星空案内人は普通の資格認定制度とは異なる

星空案内人制度は「資格」という言葉を使っていますが、一般的な資格や検定とは異なります。混同すると失敗します。「資格」という言葉に惑わされることなく、上手に星空案内人制度を利用していただきたく思い、この節を書くことにしました。

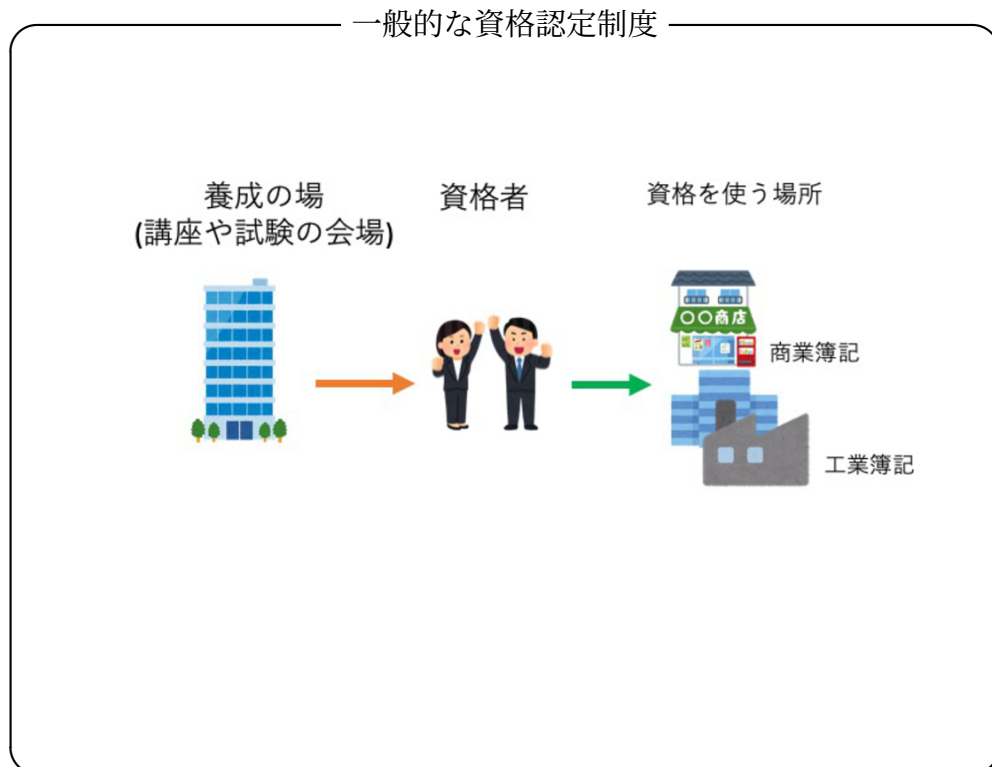
星空案内人資格は二つの特徴(一般的資格と異なること)があります。

1. 完成された星空案内人を資格認定するのではなく、「星空大好き」「宇宙に興味がある」といった小さなころざしを持った方の背中をちょっと押してあげて、星空案内の世界に入って大きな花を咲かせていただきたい、そのきっかけをこの星空案内人の資格で、という気持ちで作られていること。そのために、知識や技能の達成度を確かめる検定の要素は弱く、一方、星空・宇宙が好きなみなさん同士の交流を大事にしています(これは制度の理念でもありますので 1.1 節を参照ください)。
2. 資格を持った人を「養成する場」と「活動する場」が共存しています。その共存する場が本制度の実施団体です。

1.2.2 一般的な資格・検定制度の場合

まず比較のために一般的な資格認定制度を見てみましょう。

例えば、簿記検定(商工会議所主催)を考えてみると、下図のように、講座を開講したり試験を実施する「養成の場」と、資格を取った人が「活動する場(資格を使う場)」が別になっています。



講座を開いたり試験を実施するのは全国の商工会議所だけでなく、商業高校であったり民間のビジネススクールだったりします。そして、実際に簿記を使って仕事をするのは、小さな商店から大きな工場に至る様々な事業所です。

このように養成機関が独立している理由は大きく二つ考えられます。一つは、資格を取りたい人が多くいて、養成事業で採算がとれるから、もう一つは、養成を独立させても簿記を使う現場でそれほど支障がないからです¹。

一つ目の条件を満たしても、二つ目の条件を満たさなければ、養成機関だけが独立することはありません。実際、養成機関だけに資格認定を任せられない資格の時は、「実務経験X年が必要」などという付加追加条件をつけていますね。また、例えば医師の資格では、養成を専門とする

¹実際には資格をもっている現場では役に立っていない、または、現場で仕事ができても簿記の原理が理解できていないので応用が効かないなど様々な悩みを持った方がおいでです。

機関は無く、養成機関が同時に医療の現場です。ちょっと大げさな比喻かもしれませんが、このあたりは医師の資格と星空案内人の資格とは似ています。

1.2.3 星空案内人資格認定制度の場合

星空案内人制度の実施団体は、星空案内人の養成と同時に星空案内人が活躍できる場を持っています。図にすると以下のようなになるでしょう。



この仕組みのおかげで、講座受講生、そして、準案内人になってから実技練習や試験を受ける皆さんは、実施団体の活動に触れることができます。これが、星空案内人のエネルギー源である「ハッピー二乗の法則」や「宇宙人の帰巢本能 (仲間作り)」(1.1 節) を体験する機会になります。また、受講生、案内人の皆さんが実施団体の事業に協力してもらえるので実施団体も幸せになります。

このように、星空案内人資格認定制度は養成の場と活動の場を分離で

きない性質をもっています。一緒になっているから発展します。

1.2.4 実施団体の制度利用の方針

実施団体のみなさんには、以下のような方針で制度を生かしていただければと思っています。

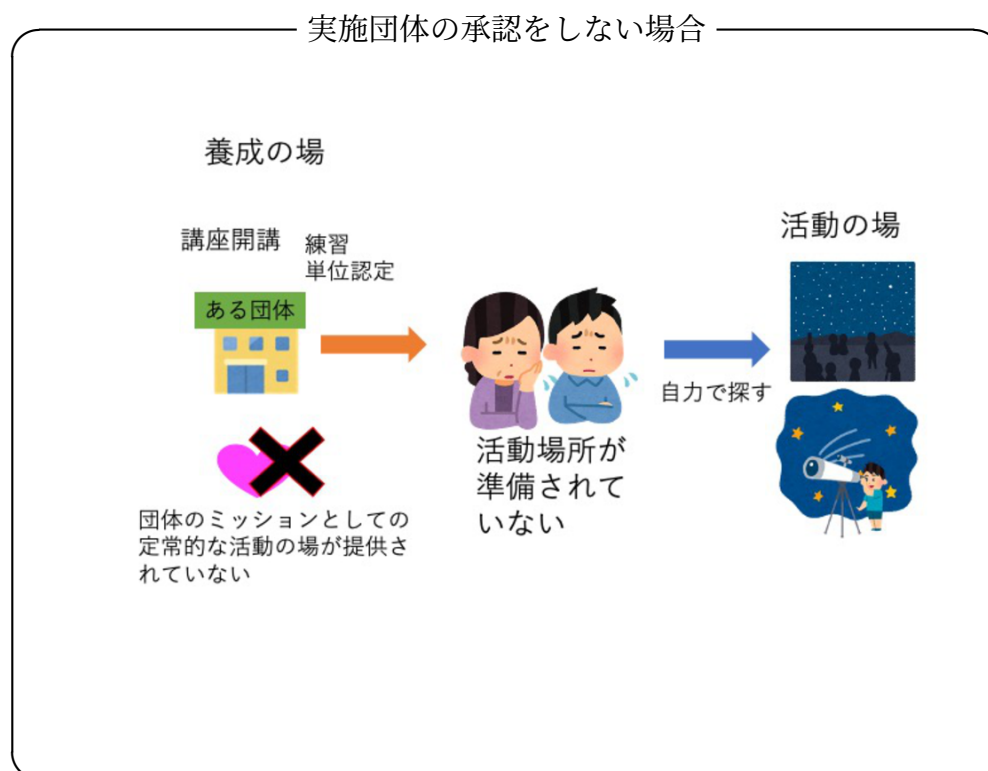
- (1) 実施団体はそれぞれ独自のミッションを持って活動している団体です。そして、ミッションの中に、星空・宇宙に関することが含まれています。
- (2) ミッション実現のために星空案内人制度を上手に利用してください。ミッションに合わせて育てたい案内人像をもって、「うちの星空案内人はこれです！」と誇りをもって案内人を養成してください。
- (3) 実施団体は案内人制度を導入することによって、受講生が集まり、星空案内人が育ち、実施団体は賑やかになるでしょう。自らの事業への協力者を格段に増やすことができます。
- (4) 受講生や育った案内人の皆さんは星空・宇宙に関する希望を実施団体の提供するサービスの中でふくらませることがができるでしょう。

1.2.5 実施団体になれない状況

下図のように、ある団体が星空案内人の活動の場を持たない(あるいは、持っていたとしても星空案内人の養成の場として提供していない)状態で講座を開いて資格認定することは星空案内人制度では認めていません。

資格発行すること自体を目的としてこの制度を利用することはできません。また、単に資格を発行することのみを目的とした利用もできません。受講生が不幸にならないためにもこれは重要なことです。

関係者や従業員研修のための講座を開くことは本制度の目的に反するためできません²。

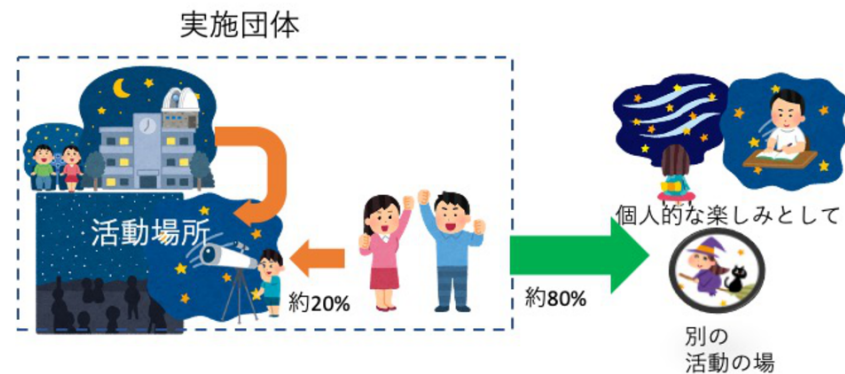


実技練習の場や実技の認定試験の場が資格だけのために設けられたもので、その団体の定常的な星空・宇宙に関する事業が伴っていないものであれば、ハッピー二乗や仲間づくりの体験ができませんので、星空案内人制度の良さは全く発揮されないでしょう。

1.2.6 実施団体の苦勞

受講生の全員が実施団体の活動に参加してくれるわけではもちろんありません。他の活動場所を見つけたり、遠方からの受講の場合は活動はその受講生の地元でということになります。また、講座受講だけで充分という方もいます。

² 広く市民に開かれた講座を開講する中に、主催者の関係者や従業員が混じって学んでいるということを禁止するものではありません。



受講生のほとんどが実施団体のメンバーになっても逆に多すぎてサポートが行き届かなくて困ることもあります。なかなか、難しいものです。私の経験では、卒業後に実施団体に残る方が20%くらい。残り80%が他の場所で活動する(そのなかの50%-30%は時々遊びに来てくれたり連絡がつく)くらいが良いと思います。

案内人の養成にはかなりのマンパワーと費用がかかるので、どうしても効率というものを考えないわけにはいきません。講座を開いて準案内人養成までは比較的効率がいいのですが、実技練習をして案内人まで養成するのはとてつもなく労力が要るものです。

そこでおすすめなのが「二段ロケット方式」です。講座期間では実技科目については受講のみで練習は行いません。そして、まず準案内人まで養成します。ここまでがロケットの一段目です。次に、実技の練習・試験まで進む方は別に登録していただきます。これを「二段ロケットに乗る」といっています。二段目に乗った方に対してのみ実技練習、認定を集中しておこないます。私の参加する小さな天文学者の会では二段目に乗る方には必ず会費を払って会員になってもらっています。いずれにせよ、

二段目をはっきりすることで、実技練習に割くマンパワーを最小限にし、経済的にも助かるようにします。

実施団体の上手な運営についてはまた別の章で詳しく検討することにして、この話題はここまでとしたいと思います。

1.2.7 ふろく：実施団体のいろいろな形態

この機会に実際に存在する実施団体のいろいろな形態を整理したいとおもいます。(2020 年秋の時点での実施団体のまとめです)

基本形 実施団体はミッションとして宇宙・星空を楽しむ、あるいは天文普及の事業/活動をしています。実施団体は、講座を開講し、また、実技の練習の場を提供し、星空案内人(準案内人を含む)の資格認定をします。受講生、資格を取った案内人の皆さんは実施団体の活動の体験をすることができます。

図式的には以下のようにです。



実施団体は、育てた案内人さんが実施団体の事業に参加し、仲間になってくれることを期待しています。実施団体のミッションは実施団体固有のものですから、そのミッションに合わせて固有の育てたい案内人像を持って案内人を養成します。

基本形の実施団体 (その 1) :

- 科学館、公開天文台、公立・私立の文化施設など。
- 上記の施設などの指定管理者制度などで運営を任されている NPO 法人などの団体
- 天文同好会など市民のグループ

ちょっと違った感じに見えるかもしれないスタイルとして実施団体が観光協会、リゾートホテルなど観光施設があります。これも同じ基本形になっています。

事業として宿泊者向けのガイドツアー、エンターテイメントとしての観望会などを定常的に行なっています。これらの場を利用して学びます。お客様を迎えた有料のエンターテイメントの中で練習や単位認定するのは無理があるので、いろいろ工夫をして実施可能な形で練習や単位認定するところが苦勞になります。

基本形の実施団体 (その 2) :

- 地方地自治体の部署や観光協会などが地元の観光施設を利用して
- リゾートホテルなど民間企業

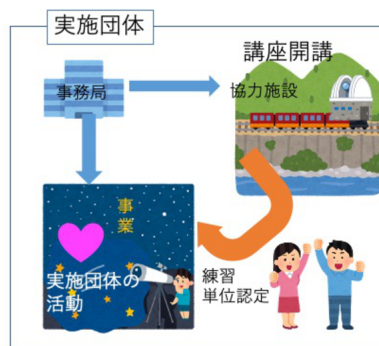
同じ基本形なのですが、実施団体が学校の場合もあります。授業の一環として講座を開催する場合や公開講座とする場合です。実践の場は、クラブ活動、学校祭、オープンキャンパス、アウトリーチ活動などの行事、卒業研究など様々です。日常の活動頻度は他の基本形より少ない傾向があります。一方で、卒業後の活動が大きな期待になります。卒業生の活動が実施団体のミッションに貢献するか、そこが実施団体の腕の見せ所ということになります。教員養成系では学校の先生になってからの活躍を期待しています。

基本形の実施団体 (その 3) :

- 大学など (教員養成系を含む)
- 高校など (クラブ活動の中で)

拠点となる施設がない場合 これまで扱ってきた基本形は実施団体の拠点の中に講座開講も活動の場も同居していましたが、両者が地理的に分離している場合があります。

実施団体の拠点/事務所から離れた場所、星が見やすい施設などを借りて講座を開講し(合宿タイプの場合が多い³)、星空案内実践の場所は、実施団体が行う定期的な観望会や出前観望会です。



実施団体活動の場が案内人養成の場になっているので、基本形の条件を満たしています。しかし、受講生や案内人の皆さんと実施団体の交流の確保することが難しいことが多く、この点が課題になります。改善策としては、合宿だけでなく一部の講座を活動の場に分散させることが考えられます。

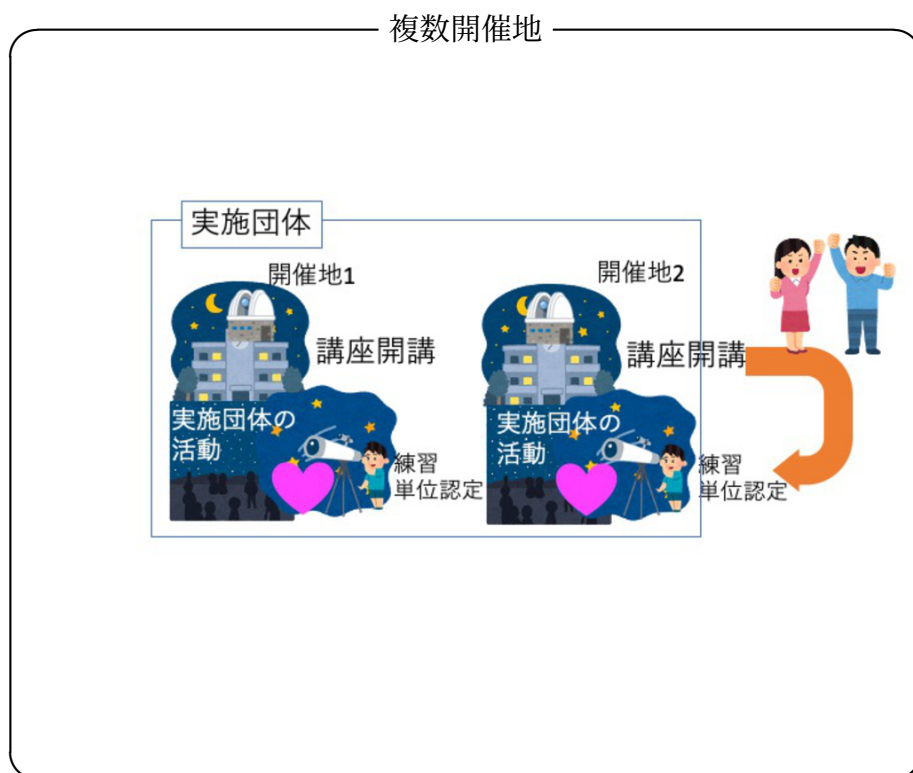
天文同好会などで固有の事務所などが無い場合も開催場所には苦労します。資格をとった案内人さんと実施団体とを結びつけるための仕組みをいろいろ工夫しなければなりません。しかしなんといっても実施団体の主催する活動が盛んであれば本制度の導入は成功すると思われます。

基本形の実施団体(その4)：

³運営機構では合宿タイプよりも3ヶ月から一年かけてじっくり学ぶタイプを推奨しています。

- 基本形(その1)のような施設を持たない、企業等。
- 市民のあつまった天文同好会などで所属施設がないような場合

複数開催地 実施団体が複数の施設の運営に携わっていることにより、開催地がマルチになる場合があります。それぞれの開催地に養成の場と活動の場を持っているので、基本形が二つ並んでいる場合です。



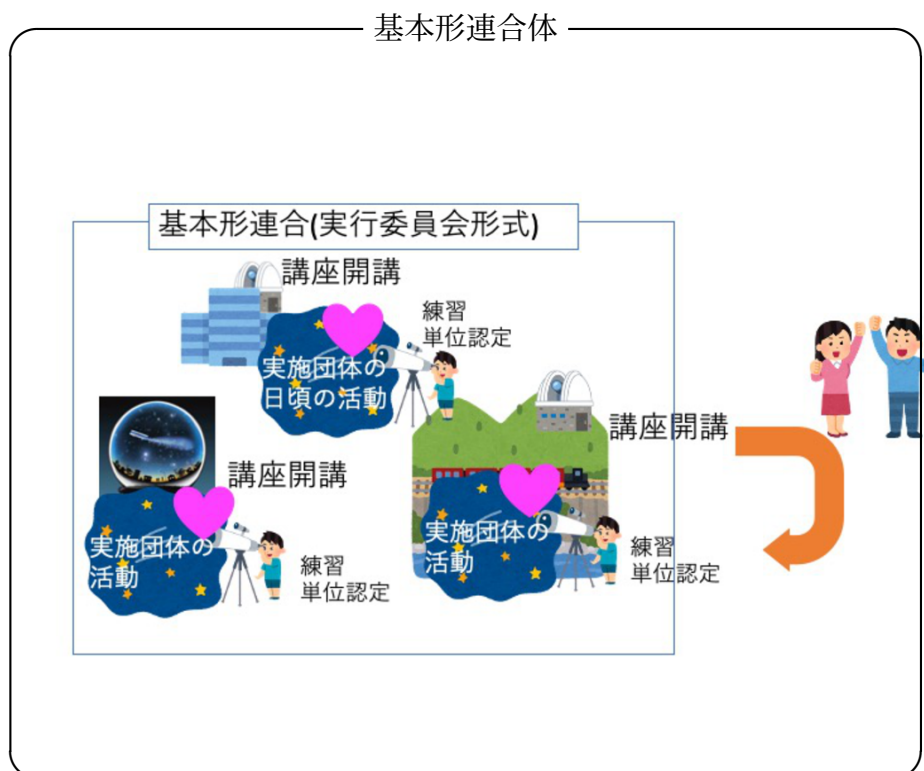
開催地がある程度以上離れている、あるいはそれぞれでミッションが異なる場合は、実施団体を二つに分けたほうがスッキリした運営ができますのでそちらを推奨します。



複数開催地：

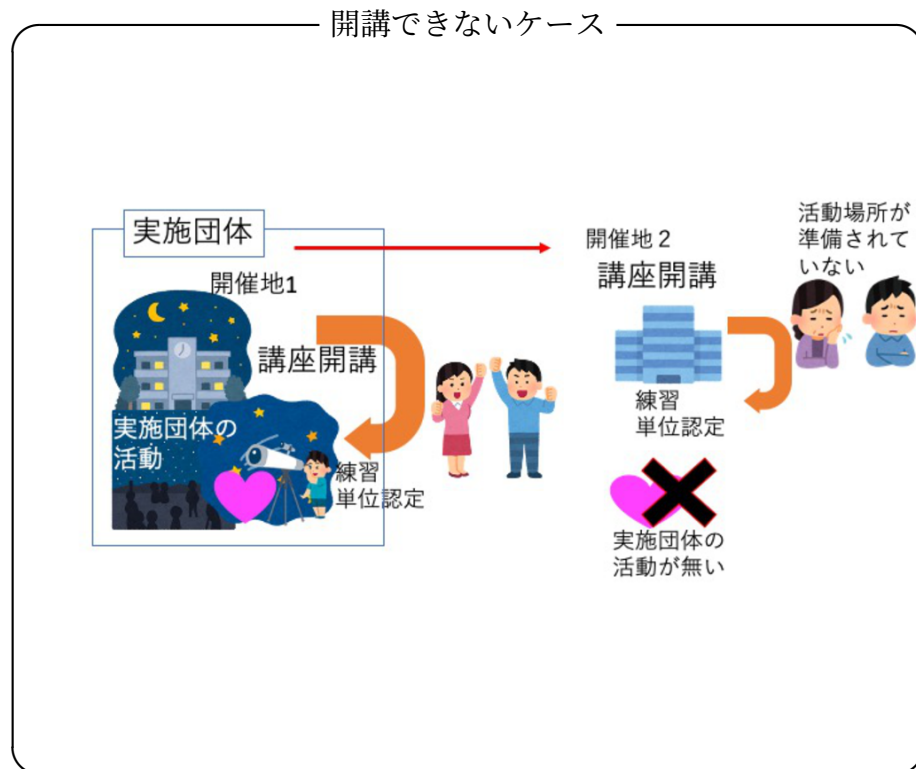
- 一つの団体が複数の施設の指定管理などを受けて行う場合。
- 一つの団体が離れた地域で複数の拠点を持つため、それぞれの拠点で申請し、複数の実施団体として活動している場合。

基本形連合体 基本形をもった組織が共同して、複数の市町村にまたがる地域に対して活動する場合があります。全体として実行委員会などを作り、その委員会が実施団体になります。



実施団体であっても講座を開講できないケース 実施団体が新たな開催場所に拡大しようとする場合は注意が必要です。

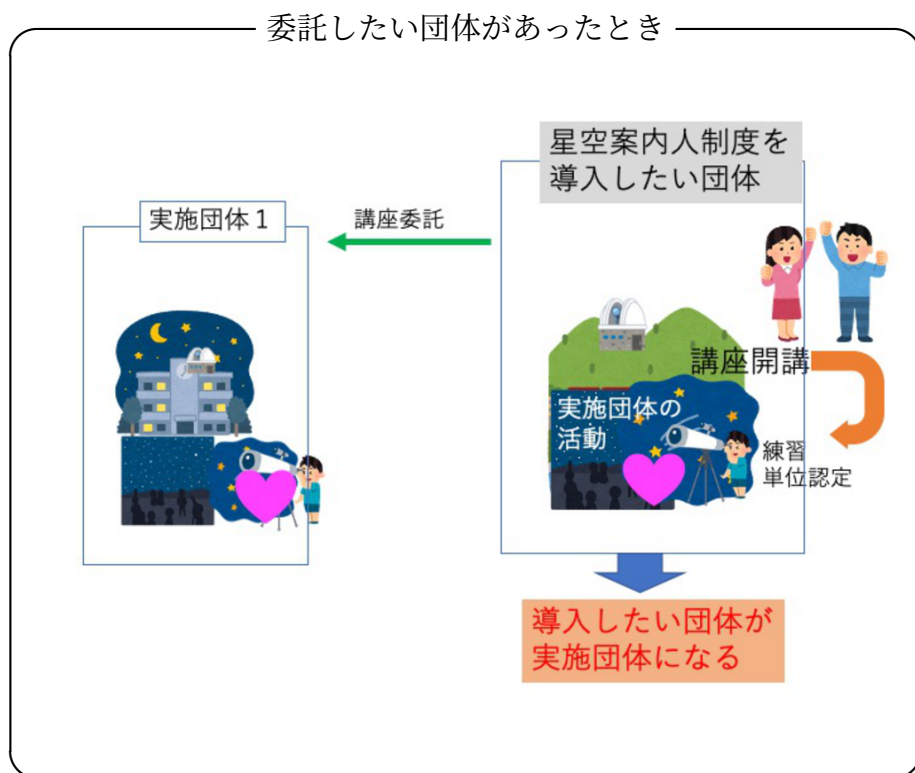
新しい場所に活動の場所が無いときは、条件を満たさないので新たな開催はできません。先に述べた、複数実施団体のスタイル(それぞれが活動の場を持っている)になるよう計画すれば実現可能になります。



ある団体から開催を委託される場合があるかもしれません。これもそのまま受託することはできません。委託した団体はそれ自身のミッションをもっており、独自の育てたい案内人像をもっていることが前提になります。その育てたい案内人像は受託する団体が持つ案内人像とは一般的に異なるものだからです。

この場合の解決方法は、

- (1) 制度を導入したい団体 (委託したいと思った団体) が実施団体になってください。
- (2) 受託側に委託側のミッションや育てたい案内人像を伝え、同意してもらってください。
- (3) 講座運営の一部あるいは全部を委託するときは、委託して実施団体になるための申請書が別にありますのでその様式で申請してください。



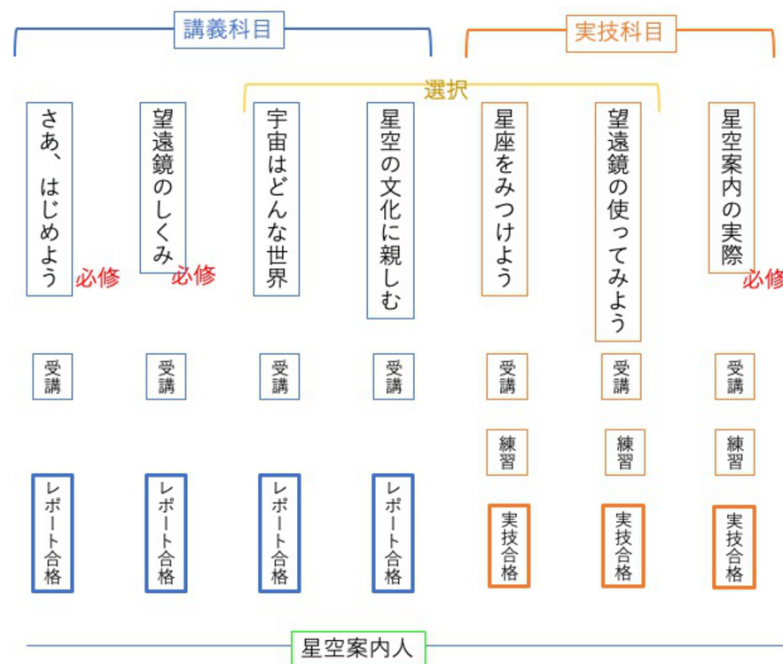
1.3 準案内人と二段ロケット方式

1.3.1 準案内人誕生の歴史

星空案内人資格認定制度の黎明期⁴には試行錯誤を繰り返しながらカリキュラム・教科書・制度の枠組みなどが徐々に完成されていきました。準案内人という仕組みもその中で誕生しました。

制度がスタートした 2003 年、すぐに何人かの星空案内人が誕生しました。しかしその後、なかなか案内人の資格を取る人がいません。最初は、すでに星空案内の力を持った方が認定を受けたので簡単に資格がとれたのでした。しかしその後は、一から勉強を始めて星空案内人の資格に挑戦される方が多かったです。この場合、資格取得はとても難しいものでした。

当時の資格要件は下図のように、必修科目三科目と選択科目のうちの三科目の合格が必要でした。この基準は現在も同じです。

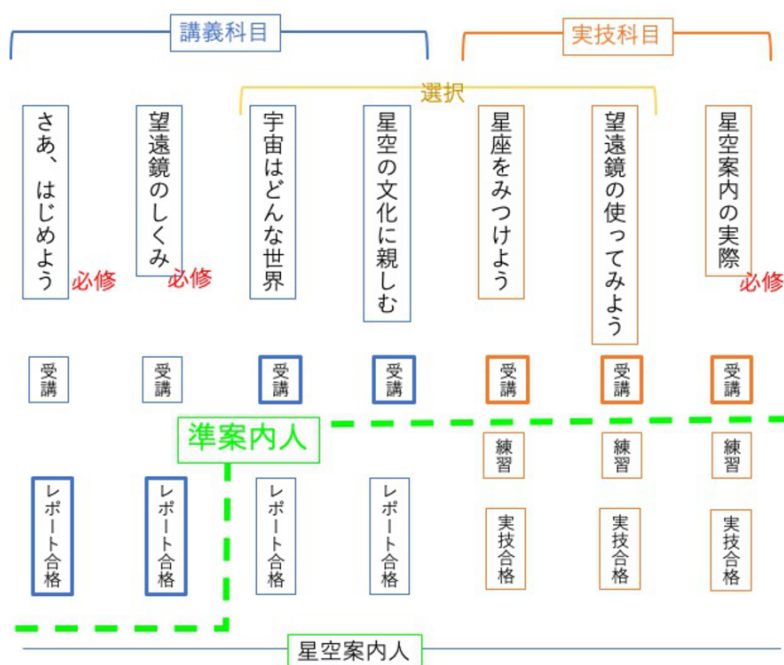


⁴2002 年ころから全国展開が始まる 2007 年ころまでのおよそ 6 年間

勉強を始めたばかりの人にはこれはとても高い基準です。とくに、実技科目が大変です。

たとえば、「星座をみつけよう」を考えてみましょう。読者のあなたが小さい頃から星空に親しんでいたとすれば、実技試験に出てくる有名な星座を見つけるのは何の苦勞もないでしょう。しかし、星は好きだけど星座はよくわからないというところから出発する場合はどうでしょう。夜の星空を何度も何度も見て星座を覚えていくのはとても根気のいることですし、時刻や季節によって星座の形が回転しますので同じ形でも違って見えてしまいますから色々な時刻や季節で見慣れる必要があります。天気も、いつも良いわけではありません。ですから、練習して認定試験まで進むには大変時間がかかります。その間に、仕事が忙しいなどでモチベーションが下がってきます。

本制度で設定した資格のレベルは決して高いものではないと思ったのですが、それでも、初心者にとっては非常にハードルは高いものでした。いろいろな議論と研究を重ねて誕生したのが下図のような準案内人という中間ステップです。



ここにも試行錯誤がいっぱいありましたが、当時の講座スタッフの村上紗知子さんが奮闘してくれて準案内人という仕組みが完成されました。村上紗知子さんは準案内人の生みの親です。

この二段階方式によって資格取得が容易になりました。星空案内人の講座の受講生の 90% 近くは準案内人の資格をとることができるようになりました。そして、さらに挑戦しようと思った人が気持ちも新たにして案内人の資格取得に挑戦するようになりました。受講生の 10%–20% が星空案内人の資格取得まで到達できるようになりました。

現在までの経験でいえることは、準案内人という資格は本制度が機能するためには必須だということです。

1.3.2 二段ロケット方式の誕生

山形での当初の講座は、全体で 4 ヶ月ほどの講座の期間中に実技科目の練習をしたい方には練習時間を設け、できそうな方には実技試験を受けていただくようにしていました。受講生の中には実技練習やりたくてやりたくて仕方ない方もたくさんいます。実技の練習は晴れないとできないので練習の日程を十分に準備しないと希望に沿うことができません。実技の練習と実技試験のために必要なマンパワーは相当なもので、講座期間中スタッフは息も絶え絶え、、大変なことになりました。講座の開講だけでも大変なのに。

頑張って指導したのに、星空案内には興味なく望遠鏡操作だけわかれば良いというかたもおいででした。そのときはスタッフはがっかりです。スタッフとしては労力をかける以上、星空案内人になっていただきたいです。

そこで誕生したのが二段ロケット方式です。

まず、最初に講座を開講しますが、実技科目に関係した練習は一切おこなわず、準案内人の資格を目指していただきます。どんなに要望があっても望遠鏡の練習などはしないでまず準案内人になっていただきます。こ

れがロケットの一段目です。準案内人になったら資格認定書の授与式を盛大に行いお祝いします。

次に、準案内人から案内人に進むためのコース、二段ロケットを準備します。そこで、準案内人の方にロケットの二段目(星空案内人養成コース)に乗るかどうかを判断していただきます。乗ると決めたら二段ロケットの連絡網(ML など)に登録します。準案内人までで良いというかたはこれで卒業し、準案内人として活動します。(もし後日、案内人になりたいくなれば、二段ロケットに乗りたいと申し出ていただければいつでも乗れます。)

二段ロケット目に乗った方と既に案内人になった方、講座運営者が連絡をとりながら練習の場を設けたり、実技科目の認定試験を行ったりして案内人が養成されます。二段ロケット方式ではスタッフの負担を最小限にして案内人を養成することができます。実施団体が定常的に行っている観望会などの活動が二段ロケットの練習や試験場所になると非常に効率が良くなります。

また、二段ロケットに乗る方には会費を払って実施団体の会員になっていただくという方法も取れます。そうすれば、ボランティア保険に加入する費用、実技指導のための費用なども賄えます。

準案内人から案内人になる割合はだいたい20%くらいが標準的です。例外なのは開講初年度あるいは2年目くらいの初期の講座で、このときは非常にモチベーションが高い方が集まるので50%以上になると思います。しかし、これは特殊です。

なお、二段ロケット方式は本制度の運営規則で定められたものではありませんので、実施団体によってこの方法が適さないあるいはもっと別の方法があるということも考えられますのでその時は採用しなくても結構です。各実施団体で工夫してみてください。

1.3.3 準案内人の魔法

準案内人でとどまり、案内人にならなかった人がいることは、主催者側としてはせっかく講座をしたのにとガッカリした気分になったりするかもしれません。また、なんとか案内人になって欲しいと思うかもしれません。ところが、この考えが間違っていたことがその後わかってきました。全国の星空案内人の活動を遠くから眺めていると、案内人の活動よりも準案内人の活動の方が大きな力を持っていることに気がつきます。

理由のひとつは、準案内人の資格をとった人の数がとても多いこと。案内人にならなかったからといって何もしないわけではなく、準案内人の方は観望会の手伝いなどいろいろな活動のお手伝いをしてくださいます。案内人の資格を取らないで気楽な気分で活動する方が動きやすいとおっしゃる方もいます。実施団体のサポートという面でも準案内人の皆さんのパワーは素晴らしいものがあります。

準案内人の活動は観望会など目につきやすいものだけではありません。準案内人の方は見えないところで、たとえば、職場や近所の隣人に星空の楽しみを伝えたりしています。また風の便りで、講座を受けてもう何年も姿を見せない方が近所の幼稚園で星の話してたよ、とか、趣味の短歌に星を織り込んでいるよとか、伝わってきます。講座以来お会いしていない準案内人の方も見えないところで小さな星空案内をしているのですね。

このような小さな活動をする準案内人がたくさんいることの効果は非常に重要だと思います。なので、準案内人の資格だけの授与は決して報われない仕事ではなく重要な仕事をしているのだと思います。準案内人の資格認定はとても大切です。

(なお、本制度では準案内人も含めて星空案内人と考えて、資格の名称は「星空案内人(準案内人)」となっているのはこのような背景があります。普通自動車免許の限定と似た感じです。どちらも普通免許ですが、一方は(AT 限定)が付いているといった感じです。星のソムリエ[®]の愛称も案内人、準案内人どちらにも使っていただけます。)

1.4 コラム：厚切りジェイソンの英語勉強法

今朝のラジオで、お笑い芸人で NHK E テレ「えいごであそぼ」などにも出ている厚切りジェイソンが語っていた英語勉強法はなかなか説得力があった。試験のための勉強は高得点取れてもすぐに忘れて役に立たない、いくら時間と金をかけてもダメだそうだ。確かに私自身、中高大と 10 年かけても多額の教材費をかけてもさっぱり英語は使えるようにならなかった。まずは楽しく！がだいじ、そして、暗記してもダメ、使うことが大事。全くその通りだと思う。

そして、星空案内人も同じだと思った。資格のために勉強して認定レポートや認定チェックシートで実技試験が合格しても実は星空案内人、星のソムリエであることとほとんど何も関係しない。実際に星空を楽しんだり、それを伝えて喜んでもらってハッピー二乗を感じることが星空案内人(星のソムリエ)であることだ。実際に星空案内することは楽しいし、それをやっていると自然に知識も技能もついてくる。

実は資格などなくても星空案内できるし楽しい。資格制度は単にきっかけを作るだけである。星空案内人が最近人気が出てきて、資格認定制度の実施団体になりたいという希望もたくさんいただくようになったが、資格認定制度にすれば人が集まってきて、活気が出てくると勘違いしている人が増えているのが気になる。星空案内人(星のソムリエ)の皆さんが元気がいいのは資格があるからではない。1.1 節で説明したように「ハッピー二乗の法則」と「宇宙人の帰巢本能」が満たされているからである。

実際、星空案内人(星のソムリエ)の活動が活発になる理由がよくわからなくて調査していた頃、アンケート調査をしてわかったことは、「星のソムリエ」の名前に惹かれて、あるいは、資格があるから、という理由でみなさんが受講生しているわけでないことであった。調査を進めてわかったのがハッピー二乗の法則である。

したがって、受講生や資格を取った方が上記の条件が得られる環境を準備できない実施団体の申請は承認しないことにしている。資格だけで実際に幸せになれない受講生がでることは忍びないから。

第2章 講座運営

2.1 講座運営の典型パターン

講座実施から認定までのもっとも標準的な進め方を紹介します。制度規則だけでは実際の講座運営のイメージが湧きにくいと思いますので以下を参考にして計画してください。細かいコツは幾つかありますが、まずはミニマムを書きます。

2.1.1 準案内人資格取得まで: 星空案内人 (星のソムリエ) 講座

以下の科目の講座およびオリエンテーションを行います。

- (1) オリエンテーション (受講が円滑に進むための説明)
- (2) さあ、はじめよう (講義科目)(100 分以上)
- (3) 星空の文化に親しむ (講義科目)(100 分以上)
- (4) 望遠鏡のしくみ (講義科目)(100 分以上)
- (5) 星座を見つけよう (実技科目)(100 分以上)
- (6) 望遠鏡を使ってみよう (実技科目)(100 分以上)
- (7) 星空案内の実際 (実技科目)(100 分以上)

- 講義内容は講義要綱に従って実施してください。
- 科目の順番は制限しませんが、受講生の予備知識や興味を考慮して決めてください。
- 100 分は満たすべき最低限の時間ですので、可能なら増やしてください。100 分の場合も連続ではなく 50 分二コマにして学びやすくしましょう。

- 遅刻・早退について 15–20 分程度の時間をあらかじめ受講生に連絡し、定められた限度以上の遅刻・早退は欠席扱いにします。
- 実技の練習は講座とは別に時間を設けます。詳しくは 2.1.4 をご覧ください。実技科目では、実技の説明や背景となる考え方の説明など丁寧にしましょう。もちろん実際に機器に触れていただくことは必要です。この時、初めて望遠鏡に触れるという方もおいでです。
- 講師と受講生、受講生同志の交流は星空案内人が育つためには重要ですので交流の時間を講義以外に設けるようにしましょう。
- 受講生はいろいろなところで戸惑います。オリエンテーションは複数回行うことをお勧めします。

各科目は、月に一回または二回程度の頻度にして、間隔をあげ、全体として半年から一年のコースにすることを運営機構では奨励します。合宿という開講形式も認めていますが、星空案内人の養成の効果は劣ることを覚悟してください。合宿の場合、十分な自主学習時間、交流の時間が持てるように特段の注意を払ってください。また、合宿後のケアについても十分対策してください。

2.1.2 講義科目の単位認定

講義の出席後、各自が自宅で単位認定レポートを完成し、後日、実施担当に提出します。講座スタッフまたは講師が採点し、採点結果を受講生に返却します。不合格の場合は何度でも再提出できますので根気強く合格までご指導をおねがいします。

合宿形式の場合は、レポートに取り組む時間を設けてください。合宿期間内に完成しないときも後日採点や可否判定ができるようにしてください。

- 合格レポートはコピーして、受講者と実施団体両方で原本あるいはコピーのどちらかを保持し、単位認定のための証拠書類として、資格認定の際トラブルにならないようにしてください。
- 出席とレポートの合格の両方が揃うとその科目の単位が認定されます。
- こんな受講生がいたら：
 - ・ 出席しなくてもレポート 100 点ならば単位認定してくださいと言う受講生が時々いますが、星空案内人制度では受講の中で質疑応答するなどコミュニケーションを重視しますので、受講しないでレポートだけの合格では単位認定にはなりません。
 - ・ 講座当日にレポートを完成し提出したいというせっかちな受講生さんが時々いますが、経験的には不完全なことが多く、もし家庭で再度取り組んでみると新しい疑問が湧いて調べなおしということになるものです。その日は受け取らず一度自宅で再チェックしてからの後日受け取りをすることをお勧めします。

実施団体は受講生の成績管理表を作成し、出席、レポートの合否、単位取得の有無を記録してください。実施団体の成績管理表の保管義務は講座終了後 5 年間です。なお、それ以上の年限がたっても資格認定の単位としては有効です。受講生が持っている返却レポートが証拠書類となりますので受講生にその旨をお伝えください。

2.1.3 準案内人の認定

ここまでで、多くの受講生は準案内人の資格認定基準を満たすことができますので、まず、準案内人の資格認定をしましょう。なお、資格は受

講生に資格認定書発行申請書を提出してもらい、申請者に対してのみ判定して資格を発行してください¹。

講座終了後、準案内人の認定書授与式を行うとその後の活動に弾みがかかるので認定書授与式と懇親会の開催をお勧めします。

2.1.4 準案内人から案内人へ

講座終了後、観望会、練習会など様々な機会を実施団体は準備し、それらの機会を利用して、準案内人の資格を持った受講生²は実技科目の練習、そして実技試験の実施へと進みます。通常、半年から一年あるいはもう少し時間をかけて順次実技科目の単位取得を目指します。この間に、仲間同士のコミュニケーションや案内人になってからの活動の基盤が作られていきますので重要な時期です。そして最終段階でいわゆる路上試験のニックネームを持つ星空案内の実際の実技試験を行い、合格すると星空案内人の認定となります。(なお、スケジュールなどの都合で実技試験の実施順序が前後して、星空案内の実際の実技試験が資格取得のための最後の単位認定にならなくても問題ありません。)

2.1.5 実技科目の単位認定

全ての実技試験は、実技試験の「認定チェックシート」を用いてチェックシートに記載されている指示に従って実施してください。星空案内人制度の認定基準のページに公開されている認定チェックシート以外の方法では単位認定はできません。

¹受講生の申請がないのにも関わらず、実施団体が資格認定書を発行すると、受取人のいない認定書が発生し処分に困ることがあります。また、万一、認定取り消しの事態になった場合も受講生の申請に基づいて発行していたという経緯があると申請のあったものを却下するという意味になるので法的な取り扱いがシンプルです。

²準案内人を取ってから実技科目の練習を開始する方式を二段ロケット方式とよんでいます。制度規則上は、受講生はまだ準案内人の資格を持っていない時から実技練習、場合によっては実技科目の試験を受けることは可能ですが、その場合、実施団体の負担が大きくなりすぎ苦労した経験から生まれたのが、まず、準案内人、つぎに、実技練習から案内人へという二段ロケット方式です。

- 合格の記録がされた認定チェックシートはコピーして、受講者と実施団体両方で原本あるいはコピーのどちらかを保持し、単位認定のための証拠書類として、資格認定の際トラブルにならないようにしてください。
- 各科目の出席と単位認定チェックシートの合格の両方が揃うとその科目の単位が認定されます。
- 星空案内の実際の実技試験が合格し、条件が整ったら、受講生に資格認定の発行申請書を書いて提出してもらいましょう。申請に基づいて実施団体は資格条件を満たしてるか判定し、満たしていれば資格認定書を発行します。活動の時に名札として利用できる名前と写真の入った認定証の発行も合わせて行います。

準案内人のうち案内人を取得するのはおよそ 10%-20%程度が目安です。実技科目の指導はスタッフの負担が大きいです、貴重な人材となります。案内人に進みたい方へのご指導をお願いします。

一方、準案内人までで良い(案内人に進まなくて良い)と判断された方の重要性に注目してください。案内人の資格をとった方が星空案内に活躍する人で、案内人に進まないと考えた人は落伍者/あるいはそれほど熱くない人といった考えを決してしてはいけません。実際、全国の星空案内活動の様子を見ると、準案内人資格をとって活動している方のパワーがとても大きく、目を見張るものがあります。準案内人資格取得で星空案内の活動は十分にできますし、日常生活の隅々まで活動が広がるという意味では人数が多い準案内人の活躍がむしろ重要です。実施団体は、準案内人の方とコミュニケーションを持ち続け活動をするを強くお勧めします。

2.1.6 資格取得後

この制度の実施団体は、ミッションに合わせた育てたい案内人像をおもちのことと思います。その実現を目指して活動してください。

準案内人、案内人、あるいは受講のみの方と連絡網を確立し、一緒に実施団体の活動を盛り上げるように企画してください。また、案内人さんの立場になってみると、生みの親である実施団体の準備する活動場所はとても頼みになる場所です。実施団体は活動場所の提供に努めてください。

運営機構では星空案内人資格制度の発展のために様々な活動を行っています。

資格発行を目的とした案内人養成は制度として認めていません。

制度の実施団体として認められた団体が、別の団体から講座の委託を受けた場合は、委託者がまず制度利用のための申請をするようにしてください。(専用の申請書が準備されています。)

ver.2020.9.1

2.2 キット望遠鏡の使い方

講座の中で組み立てキットの望遠鏡を講座の中でどう使うかについて、実施団体から何回か相談をうけました。そのつど、運営機構でも検討しました。それらをまとめてみたいと思います。

2.2.1 工作キットの望遠鏡で「望遠鏡を使ってみよう」の単位認定はできるか

「望遠鏡を使ってみよう」の講義で想定している小型の望遠鏡の操作スキルは工作キットの望遠鏡のものとはかなり異なるものです。したがって工作キットの望遠鏡で「望遠鏡を使ってみよう」の授業や単位認定はできません。

「望遠鏡を使ってみよう」で学ぶべき重要なスキルで、工作キットの望遠鏡で学べないものは以下です：

- 望遠鏡の設置において、望遠鏡のバランスを取ること
- ファインダーを調節すること
- 粗動と微動の操作によって天体を導入すること

2.2.2 星空案内人の資格をキット望遠鏡を使った星空案内で取得

工作キットの望遠鏡では「望遠鏡を使ってみよう」の単位を取ることができませんが、それでも他の科目の単位をとって星空案内人になることはできます。

路上に立って、通りがかりの人をつかまえて、望遠鏡を使わない星座案内とキットの望遠鏡を使った星空案内を併用して楽しい星空案内ができます。キットの望遠鏡では月面や惑星、二重星などを観察することができます。私は個人的にはこのスタイルの星空案内は好きでよくやります。

また、このスタイルで星空案内の実際の実技試験を受けて合格し、案内人になった方もおいでです。難しい機械操作は苦手という方は、裸眼とキット望遠鏡を中心とした星空案内で路上試験に挑戦してはどうでしょう。



工作キットの望遠鏡で星空案内@街角

2.2.3 望遠鏡の仕組みを知る

望遠鏡の仕組みを知るという目的では、工作キットの望遠鏡はとても勉強になります。講座の中の「望遠鏡のしくみ」の授業の補講として工作をみんなでやるととても楽しい講座になります。

みんなで同じ望遠鏡を持つので受講生が共通の話題を持つことができます。同じ望遠鏡を使っていろいろな使い方を LINE グループなどで交換して盛り上がっている姿を毎年決まって目にします。小さな望遠鏡と携帯電話のカメラで素晴らしい映像が撮れていて私もびっくりすることがたびたびです。

自作の望遠鏡ですので改造したり、実験することも可能です。

ということで、講座の中に工作の時間を組み込むこともお勧めです。

2.3 講座がうまくいっているかのモニター

星空案内人講座がうまくいっているかは実施団体としては一番気になることだと思います。星空案内人・準案内人が育ち活発に活動しているのが見える、また、実施団体の活動のお手伝いをする方が増えてくると制度の導入がうまく行っているなど実感できます。

とはいうものの、講座の中身がどう評価されているか、受講生のニーズはどこにあるかなどを常にモニターすることは大切です。

ここでは、一つの方法として受講生へのアンケート調査の方法と典型的な結果について考えたいと思います。前半は一つ一つの科目の講義の質の評価、後半は講座全体の評価について考えます。

2.3.1 講義の状態のモニター

私自身が実施に関わっている NPO 法人小さな天文学者の会では各講義の後にミニアンケートを開講当初からとっています。(山形で実施している「やさしい宇宙講座」と東京で実施している「たのしい宇宙講座」の二つがあり、どちらでも同じ方法で行なっています。) 非常に簡単で、満足と難易度だけのアンケートです。

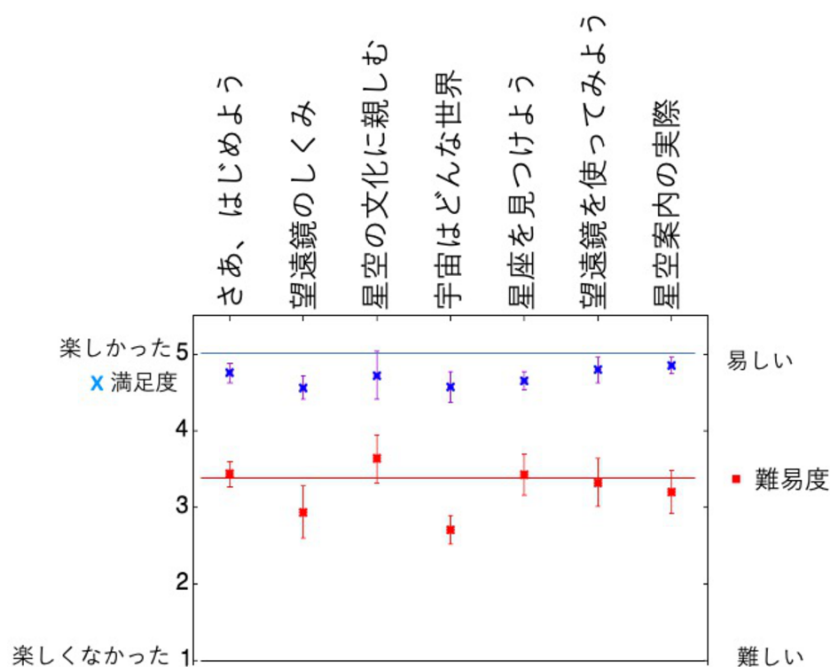
たのしい宇宙講座アンケート
★講座の内容はいかがでしたか？ つまらない← 1, 2, 3, 4, 5→楽しい
★講座の難易度はいかがでしたか？ 難しい← 1, 2, 3, 4, 5→易しい
★一言お願いします。

名刺サイズの小さな紙切れです。印刷の紙も節約できるし、記入もそんなに負担でなく、帰るときにちょこちょこっと書いて渡してくださいます。

おまけのようについている「一言お願いします」が結構有益です。部屋で「冷房が効きすぎて寒かったとか」、講義内容で「ちょっと時間が短すぎ、もう少し詳しく説明して欲しかった」など今後の改善点などを書いてくれます。しかし、もっと重要なのは、受講して良かった！という感動の声で一杯で、この一言欄でスタッフは次に進む元気が出てきます。どんなコメントがあるかここでひとつひとつ紹介できませんが、涙なくして読めません！（ちょっと大げさか？）。

最初の二つの項目、満足度 (楽しかったか)、難易度 (易しい vs 難しい) について東京と山形の全 14 回分のデータを集積してまとめると以下の表のようになります。合わせてグラフでも示します。

科目	満足度 (5 点満点)	標準偏差	難易度 (5 易しい-1 難しい)	標準偏差
さあ、はじめよう	4.75	0.13	3.43	0.17
望遠鏡のしくみ	4.56	0.15	2.93	0.34
星空の文化に親しむ	4.72	0.31	3.63	0.31
宇宙はどんな世界	4.57	0.20	2.70	0.19
星座を見つけよう	4.65	0.12	3.42	0.27
望遠鏡を使ってみよう	4.79	0.17	3.32	0.31
星空案内の実際	4.85	0.11	3.20	0.28
平均	4.70		3.23	



毎年ほぼ同じ結果です。満足度は5点満点の平均4.7でほぼ満足(楽しい講義だった)。難易度は平均3.2でほぼ中間で、すこし易しめ。一言欄も参考にしながらもう少し詳しく見ると、数学や物理の理屈が入ってくる分、「望遠鏡のしくみ」と「宇宙はどんな世界」は少し難しく感じています。一方、満足度では、実技科目で若干ですが楽しかったが増える傾向があります。数字ではわかりにくいですが、一言欄を読むと、実際に望遠鏡に触ったり、実際の空で星座を見つけたり、星空案内の練習(グループワーク)で楽しかったという感想をたくさんいただきます。また、「さあ、はじめよう」は最初に念願の講座を受けられたという効果もあって、満足度が高い結果になります。

星空案内人の講座の内容は制度規則によって「講義要綱」および「教科書」でおおよそのレベル設定がされています。アンケート結果もほぼ制度設計通りになっています。全国どこの講座も同じような結果になると思います。講座アンケートをとって確認していただければ嬉しいです。

2.3.2 講座全体の状態のモニター

これもアンケートによってある程度把握することが可能です。講座終了後にアンケートをとっている実施団体も多いことと思います。

講座終了後アンケートでどのような設問するのかは各実施団体の育てたい案内人像や置かれている環境によって変わってきます。たとえば、開催地へのアクセスに問題がないか、日程の組み方や時間設定はどうか、などはそれぞれの実施団体が気になる項目について調査されていることと思います。ここでは、案内人講座の中身についてどのような聞き方がありうるかを紹介します。

- 講座申し込み時に考えた目的は達せられましたか。期待した目的と達成度をお教えてください。
- 受講したことによって新しいものや新しいことを見つけられて良かったということがありましたら教えてください。
- 講座終了後、星空案内あるいはそれに関係してやりたいことがありますか。あればどのようなことでしょうか。(あるいは、今後の抱負や目標を聞いてもいいかもしれません。)
- この講座へのご希望やご意見をおねがいします。今後の運営に役立たせたいと存じます。

アンケートは正直に書いてくださることが多いので、受講生が何を求め、何が嬉しいかというあたりをしっかりと把握することができるので、思い切って聞いてみるのが良いと思います。

これ以外に、講座前アンケートで何を求めて受講してきたかを把握しておくことも有効と思います。たのしい宇宙講座では応募者が多く倍率が3倍を超えることもあり、申し込み書に受講する目的や動機などを書いていただいて、それを参考に選考させていただいています。しかし、先着順であったり応募者全員を受講生とする場合は、受講動機を聞く機会が無いので講座前アンケートも有効になります。

第3章 星のソムリエ活動

3.1 星のソムリエとは？と聞かれたとき

星空案内人 (星のソムリエ) とはどんなものかを PR 用のチラシや講座の募集要項、自己紹介に書きたいとき、どんな表現が良いか？これはなかなか難しい問題です。以下はそのような目的のための文章の例です。ご活用ください

—— チラシなどでの短い導入 ——

星空案内人とは 星空案内人資格認定制度とは？

星空や宇宙は、見たり、感じたり、学んだりすることで、人生を豊かにしてくれます。星空案内人はこのことをみなさんに伝えます。

「星・宇宙が好き」という気持ちを持つ誰もが星空案内人になれるように導いてくれるのが星空案内人 (星のソムリエ[®]) 資格認定制度です。

星のソムリエ は、星空案内人資格認定制度運営機構が管理・運用する商標です。このコンテンツは、星空案内人資格認定制度運営機構の承認や推奨、その他の検討を受けたものではありません。

—— ちょっとくわしく ——

[ソムリエのイメージ]

レストランではソムリエが季節や料理に合わせておいしいワインを選んでくれ、また、楽しい会話でテーブルを盛り上げてくれるでしょう。同じように「星のソムリエ[®]」は、季節や場所がらに合わせて美しい星空を見せてくれたり、その場にいる皆さんの好みに合わせて、星空や宇宙の話をしてくれます。どちらのソムリエにも大切なことは知識・技能よりおもてなしの心ですね。

星のソムリエ は、星空案内人資格認定制度運営機構が管理・運用する商標です。このコンテンツは、星空案内人資格認定制度運営機構の承認や推奨、その他の検討を受けたものではありません。

[星空案内人はどんなひと?]

星空や宇宙は、見たり、感じたり、学んだりすることで、人生を豊かにしてくれます。さらに、このことを人に伝えるのが星空案内人です。星空

や宇宙を通じて、多くの人と共感し、社会を豊かにすることを星空案内人は目指しています。

[なぜ、資格認定]

星空案内をしてみたいと思っても、それはなかなかハードルが高いことです。しかし、ほんの小さなことでも星や宇宙について知りたいたくさんの方が待っています。そこで、「星が好き」という思いだけでも、あなたの背中をちょっと押してくれて、少し自信がつく資格があると、星空案内の道に一步踏み出すことができます。そこで、星空案内人資格認定制度が作られました。講座を受けてまずは星空案内人(準案内人)の資格をめざしましょう。

[学んでハッピー、伝えてハッピー：ハッピー二乗の法則]

星空案内人資格認定制度の講座を受けることで基本的な知識や技能を学び、星空を体験することができます。これは楽しいことです。これが一つ目のハッピー。つぎに、学んだことを語り伝えることで喜んでいただけます。星空案内を楽しんでいただいてもうひとつのハッピーを感じます。

学ぶことによるハッピーと人に伝えることによるハッピーと、二つのハッピーによって星空案内人はいつも元気です。これをハッピー二乗の法則と呼んでいます。

[認定基準は]

この制度は、星空案内に必要な高度な知識や技能を認定するためのものではありません。ハッピー二乗の力をかりて、星好きの誰もが一步前進するためのものです。この制度によって多くの方が星空・宇宙に触れることをめざします。星空・宇宙に親しむ文化を普及します。

この目標にふさわしい認定基準を設け、全国同じ基準で資格認定をしています。

[星空案内人と星空案内人(準案内人)]

資格は二段階: 最初のステップが「星空案内人(準案内人)」, 次のステッ

プが「星空案内人」です。それぞれ必要な科目の単位取得と講座出席によって資格が与えられます。

(くわしくは、こちら [HP])

[星のソムリエ®] 星のソムリエは「星空案内人(準案内人)」、「星空案内人」のいずれにも使うことができる資格の愛称です。「星のソムリエ®」は商標登録され全国の星空案内人の皆様が大事に使っていることばです。「星のソムリエ」を使用するときは、使用のガイドラインに従うようにしてください。

(くわしくは、こちら [HP])

資格をとってからどんな活動をしますか

資格をとったみなさんは、いろいろな活動をしていらっしゃいます。たとえば、

- ・自分の子供や身近な人に星の話をしたり、野外で星を見せたりする。
 - ・科学館や天文台、星空関連の同好会の中で星空観望会など、ボランティア活動をする。
 - ・スキルを磨いて、講演活動、科学館やプラネタリウムなどの仕事に従事する
 - ・観光地などで星空案内のガイドツアーを行う
 - ・星や宇宙に関する執筆稼働をする
- など。

本当にいろいろな方法で資格を自分の生活に活かしていただいています。

資格はいらないけど星や宇宙について勉強したいときは？

星空案内人資格認定講座は、ちょっと宇宙について勉強したいというかたにもとても良い講座内容です。講義内容は非常に幅が広いのできっと満足いただけます。気軽に講座をうけてみてください。そして、私も星空案内できるかな？と思ったら資格にも挑戦してみてください。

星空案内人資格認定制度は誰がどんな目的で行なっているのですか？

これまで述べてきたような特徴や目標を星空案内人制度は持っています。

この考えに賛同して講義内容の検討や認定基準を考えたり、全国でこの制度で資格認定をしている団体のお世話をしようと思った有志が集まって「星空案内人資格認定制度運営機構」という組織を作ってこの制度の運営に当たっています。ホームページに、メンバーや歴史が掲載されていますので参照してください。

ver.2020.9.1 (orininal form), rev.2020.9.18,

第4章 実務マニュアル

4.1 募集要項の作り方

準案内人資格認定までの (一段ロケット) の講座開講の際に作る募集要項の作り方を見ていきましょう。おおよそ次の内容を記載することになります：

- 講座内容とキャッチコピー
- 開講日時
- 申込期間
- 受講資格
- 定員
- 会場
- 受講費用
- 申し込み方法 結果通知
- 当日までの準備など
- 問い合わせ窓口
- その他開催団体の特別な事情など

4.1.1 講座内容とキャッチコピー

募集要項は講座を映す鏡 これまでの準備の集大成が凝集されるのが、募集要項のチラシやホームページでしょう。

何を訴えるか？ どのような講座なのか、自分たちが訴えたいことは何か、これが募集要項 (ホームページやチラシ) のトップに来ます。

ここはマニュアルで「こうすれば良いよ」というのが書けない部分です。どのような人に受講してほしいか？ どのような案内人を育てたいか？ が伝わるよう：

- 少し大げさなキャッチコピーを準備、
- 少し丁寧な説明を加える、
- 応募者が誤解しないようにする。

マニュアルとして書けることは数少ない中で、次の 2 点は含めてください。

最初の点は制度の理解です。受講生がどんな制度であるか確認できて、受講生の信頼を得る様にすることが大切です。募集要項の中で説明するだけでなく、**星空案内人資格認定制度のホームページ¹**を必ず引用してください。これによって、受講生が自分の手で資格制度の中身を確認できます。全国制度であることも確認できます。

制度の説明をする際に「**星のソムリエ[®]**」を積極的に利用しましょう。「星のソムリエ」は商標登録されていますので商標使用のガイドライン²に沿った使い方をします。最初に出てくる「星のソムリエ」という文字には商標マーク (®) を付けてください。また、「星のソムリエ[®]」は、特定非営利活動法人星のソムリエ機構が管理・運用する商標です」と募集要項のどこかに (小さくても良いので) 記載することを守ってください。講座開講の時に「星のソムリエ」を使うのは商標使用の許諾不要です。安心してご使用ください。ロゴマークも許諾を受けることなく誰でも使えます。

第二のポイントは育てたい案内人像です。講座の実施団体が増えてくると隣接する開催地との受講生の獲得競争になります。講座の特徴を明確にすることによって、自分たちの活動に沿った興味のある人が集まってくるようになり、講座開講のメリットを最大限に引き出すことができます。

¹<https://sites.google.com/site/hoshizoraannaishikakunintei/>

²<https://sites.google.com/site/hoshizoraannaishikakunintei/xingnosomurie-shang-biaogaidorain>

ところで、「星のソムリエ」や資格認定制度を知ってもらうためのキャッチコピーのようなもの、短い説明文は独自に考えるのは大変ですね。制度のホームページの「どんな制度？(制度の説明)」に例文があるので、ここに掲載されている例文を利用すると楽です。

最後に誤解のない様にする点です。

星空案内人と星案内人(準案内人)という二つの段階があることを伝えましょう。講座での当面の目標は星案内人です。星案内人と星案内人(準案内人)とどちらも星案内人には違いなく、星のソムリエという言葉はどちらにも使えます。たとえば、自動車の普通免許で、眼鏡の条件やオートマの条件のようなもので、その条件が星案内人で、どちらも星案内人には違いありません。正案内人という言葉を便宜上使う人もいますが、これは正式な名称ではありません。

受講しただけで資格が取れると誤解する人も結構います。各科目にレポートや実技の試験があることをきちんと伝えましょう。

チラシやホームページでは、キャッチコピーの次は、詳しい制度や育てたい案内人像よりも、後述する開講日時、場所、費用などの方が重要となると考えられますので、制度の丁寧な説明や育てたい案内人像は全体の後ろの方になるかもしれません。

4.1.2 開講日時

科目は七科目ですが、実施団体の特徴を出すために必要に応じて加えることもできます(自由科目)。例、「光害の理解」、「昼間の星空観察」。

一月に一回(一科目)の講座で半年、一年くらいかけてじっくり進めることもできますし、毎週、隔週程度で二、三ヶ月で終了したりすることも可能です。1日に2科目を行う例もあります。連休などを利用して合宿形式で短期に終了するスタイルを取る実施団体もあります。短期は、資格がとにかく欲しいという方には魅力がありますが、そもそもこの制度は資格が目的ではありません³、短期で身につくような内容ではありません。

³資格発行を目的とした開講は認められていません。

せんので、できるだけじっくり、星空観望や工作なども交えながらゆっくり進めることをお勧めします。

時間について注意点が一つあります。一科目は最低 100 分を確保することと制度規則で決められています。これを一科目は 100 分という決まりだと誤解する方が多くいらしゃいます。100 分は最低限です。実際の講師経験のある方は痛感することですが、講義要綱で定められた内容を 100 分でカバーするのは非常に難しいです。120 分など適宜加えることをお勧めします。

100 分連続に予定を組むことも良くありません。受講生の集中力が 100 分あるとはとても考えられません。50 分-60 分の講義を 2 回で、間に休憩時間を入れるなどの対応を考えましょう。

講義の前に和やかに交流できる雰囲気を作るなどの時間を持ったり、休み時間や終わってから観望する時間を設けたり、資格や単位の取り方、レポートの提出方法などのガイダンスの時間も必要です。ゆとりを持った計画にしましょう。

以上を考えて、募集要項には集合 (受付時間)、終了時間を明記します。

4.1.3 申込期間

申し込み期間は、募集要項リリースから応募締め切りまでです。受付の仕方によって注意すべきことがいくつかあります。

もし、先着順で受け付けて定員になれば締め切りというような場合は、(1) 募集開始を早く知った人が有利になるので、募集要項のリリース時期を決めてそれまでは公開しないしない、(2) 定員に達したときの受付の停止や定員になったことの通知方法、を検討する必要があります。

抽選の場合は、上記の心配はありません。抽選にした場合、結果の告知の方法や時期などを募集要項に明記しないと、申し込んだ人が心配になります。また、育てたい案内人像にあった動機の人を優先して採用したいときは、抽選は効率の良い方法ではありません。地元で活動する人を確保したいときは、地元の人の優先枠を設けることも良い考えです。

選考するのも良い考えです。動機や講座に何を求めるかを書いてもらい、講座の運営スタッフで選考すると、育てたい案内人像にフィットした受講生を確保できる可能性が高くなります。選考の場合、競争率が約二倍以上だと、講座運営が非常に楽しく、楽になるというのが柴田の経験則です。

タイムラインとしては

企画段階	講座の準備：方針、日程、講師依頼、会場確保などなど
募集要項の作成	上記の企画段階と重なります
募集開始から締め切り	PR 期間でもあり、一二ヶ月くらいが標準でしょうか。
締め切りから開講まで	受講生への通知、採用にならなかった人への通知、名簿作りなど、典型的には二週間くらい以上でしょうか。

といった感じになるでしょう。

4.1.4 受講資格

特に、制限はないと思いますが、よく問題になるのは子供の受講です。講座内容の難易度からすると中学生以上くらいから可能と思われそうですが、星空案内を実際にやる人を想定して、もう少し高い年齢層 (例、18 歳以上など) とする例も見られます。義務教育以上では、高校生、大学生などの指定は一般にできないので注意してください⁴。

小学生でもぜひ挑戦したいというときは受け入れている例もあります。保護者の同伴/送迎など安全面への条件付けは必要でしょう。

資格条件を満たすと年齢に関わりなく制度としては資格が与えられることとなります。小学生にはまだ星空案内させるわけにいかないので資格は発行しないという例も見られますが、制度としては年齢制限は設けていませので必要な科目の単位を取れば資格を与えてあげてください。資格を取ることと実際に星空案内をすることは全く独立です。星空案内

⁴高校に行かないで職業に就くばあいや高校とは異なった教育機関に進まれる方もいるので、制限をつけるのであれば年齢を指定してください。

人の資格を取っても現場において小学生に星空案内をさせないのが通常の判断と思われます。大人に混じって案内のお手伝いで参加することは可能と思います。(私自身経験もあり、子供が大活躍する場面もたくさん見えています。)

4.1.5 定員

定員の設定は実施団体の判断になります。一般的に言えることは小中学校のクラスサイズよりも大きいと講義内容を伝えるのが徐々に困難になるので避けるべきでしょう。特に、星空案内人は人と人のコミュニケーション、つながりが重要な制度ですので、人数の多すぎる講座は開かないようにしましょう。

実技講座で少人数に分かれて実習することになると思います。例えば、望遠鏡を 5 台準備できるとすれば、一つの望遠鏡に対して受講生が 5-6 人が限度と思われますので、講座の定員は 25-30 人までになります。

4.1.6 会場

会場について特に制限はないと思われます。星座を見つけよう、望遠鏡を使ってみよう、プラネタリムを使ってみよう、星空案内の実際ではそれぞれの内容が実施可能な場所を選びましょう。

ただし、1 段目ロケット (準案内人まで) の講座では、晴れた空野外での観察は必須ではないので、曇っていれば室内での講義ということになります。晴れていても基本は室内での講義という計画も可能です。従いまして、野外のスペースの確保は必須ではありません。

講座終了後の実技科目の練習や試験ではもちろん野外が前提になるでしょう。

4.1.7 受講費用

受講費用については制度としては規定はなく、実施団体ごとに自由に決めてください。科学館などが主催で受講料無料のところありますし、市民団体で財源が受講料のみの場合ですと経費に見合った受講料を設定することになります。

4.1.8 申し込み方法 結果通知

最近はオンライン申し込みの場合が多いようですが、チラシなどを媒体にして紙に書いて郵送というような昔ながらの方法も可能です。申し込みを受け付けたことの通信、抽選や選考の場合の結果通知の方法や時期についてはあらかじめ申し込みしたときにわかるようにしておきましょう。

4.1.9 当日までの準備など

講座当日必要なものとしては、(1) 受講料、(2) テキスト、(3) 筆記用具、などが考えられますが、実施団体ごとに決めましょう。

4.1.10 問い合わせ窓口

実際やってみると、いろいろな問い合わせがあります。問い合わせ窓口を明記します。

4.2 PR について

講座受講生の募集、講演会などのイベントの参加者募集などで PR をしますが、参加者が目標に達するか不安ですね。

かなりマニャックですが、簡単な数値モデルやシミュレーションでこれくらい PR したらこれくらいの参加があるという計算が可能です。これができるで一喜一憂しなくてもよいですし、PR 戦略も毎回行き当たりばったりでなくて作戦を立てることができます。

簡単な数値モデルとシミュレーションという二つの手法を以下で説明します。

4.2.1 簡単な数値モデル

チラシを見るとか何かの刺激があると、応募しようかなと思ったりしますが、徐々に忘れられていきます。このような刺激を

$$I(t) = \begin{cases} 0 & \text{for } t < 0 \\ I_0 e^{-t/d} & \text{for } t > 0 \end{cases} \quad (4.1)$$

4.3 商標「星のソムリエ」の使い方

4.3.1 実施団体の皆様へ

講座開講の時

「星のソムリエ」は商標登録されています。使用許諾を受けてから使用することが原則になります。詳しくは、制度のホームページに掲載されている**最新の**「星のソムリエ」商標使用に関するガイドライン”に従ってください。

ただし、許諾なしで使える例外が二つあります。

- (1) 機構が認証する本制度の実施団体が本制度に定められた講座を実施する際に使用する場合。
- (2) 星空案内人および星空案内人(準案内人)の資格を持った人が自らを「星のソムリエ」と呼ぶ場合。

です。

(1) は、講座開講の PR などの場面で「星のソムリエ」を使用する場合は許諾がいらないというものです。どうぞ星空案内人講座ではお使いください。この場合であっても、

- ® のマークをつけること、
- 使用した媒体の中で、
星のソムリエ[®] は、NPO 法人星のソムリエ機構が管理・運用する商標です。
と記載することを忘れないでください。

上記の特別措置は講座開講の場合だけです。講座以外の活動、実施団体が開く観望会や講演会などで「星のソムリエ」を使う場合は使用申請をして許諾を得る必要があります。制度のホームページに申請書の様式があるので申請してください。

実施団体の名称のなかに「星のソムリエ」を使う場合

団体名に「星のソムリエ」を使用するときは許諾申請が必要です。制度のホームページに申請書の様式があるので申請してください。

受講生に対して

講座を受講して、星空案内人 (準案内人)、星空案内人のいずれかの資格を得られた方は、自己紹介するときには「星のソムリエ」は許諾なく使えます。例えば、名刺に記載する場合。この点、受講生にお伝えください。なお、® のマークをつけることは守ってください。

詳しくは、「星のソムリエ商標利用の手引き」を準備しておりますので配布ください。以下からダウンロードできます。

<https://star-sommelier.org/trademark/tm.pdf>

4.4 問題発生！あるある：対策

4.4.1 望遠鏡の台数が足りない

受講生 30 人で「望遠鏡を使ってみよう」の講義をします。実際に組み立てやファインダー合わせ、導入などを経験してもらいたいのので、たとえば、5 人で 1 グループとして 6 グループ、すると望遠鏡が 6 台必要です。かき集めても 3 台しかない、あるいは、2 台しかない場合があると思います。さて、どうしましょう？(1 台に 10 人の受講生とかいった授業はやめてくださいね。)

二つの方法が考えられます。(1) 日程を分けて 2 回おこなう、(2) レンタル望遠鏡を使う。

まず、(1) 日程を分けて 2 回おこなう、を説明します。

- 受講生を 6 グループ、A, B, C, D, E, F に分けます。
- 日程を「星座を見つけよう」とセットにして二つに分けます。
- 以下のように分割して日程を組みます。

日程	A,B,C グループ	D,E,F グループ
第一日	星座をみつけよう	望遠鏡を使ってみよう
第二日	望遠鏡を使ってみよう	星座を見つけよう

これで、望遠鏡は 3 台ですみます。

- デメリットとしては講師は 2 回講義するので必要なマンパワーが 2 倍になります。会場が二箇所必要になります。晴れて、野外であればあまり問題になりませんが、晴れない確率は 60% 以上でしょうから場所の確保が必要です。

2 台しかない時は、思い切って定員を減らして 20 人にするか、講座を三日に分散させるかになります。この場合、3 回出勤しますのでマンパワーは 3 倍です。この場合、受講生は一回休みになります。

別の方法は、(2) 望遠鏡をレンタルする、です。この場合は費用がかかります。受講料に含めるとよいでしょう。裏技的には学校などに眠っている望遠鏡を見つけて掘り出して借りるてもあるかもしれません。

付 録 A ふろく

A.1 星のソムリエを育てたい

星空案内人資格認定制度 (星のソムリエ®)

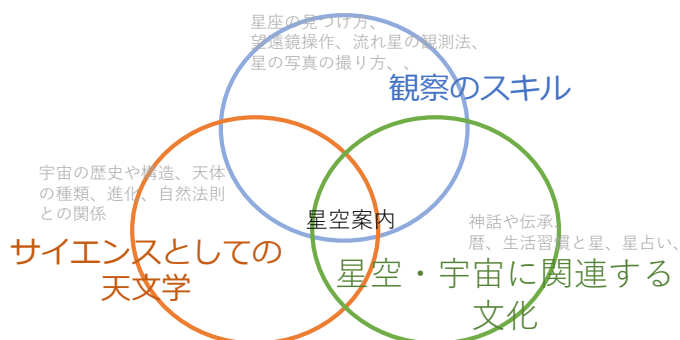
星空・宇宙について学ぶ

星空・宇宙の楽しさを伝える

ハッピー二乗の
法則



バランスの取れたカリキュラム！



制度導入を検討されている団体/個人の方へ

星空案内人 (星のソムリエ) の資格認定制度を導入して資格を発行することができる団体または個人をこの制度の**実施団体**と呼んでいます。実施団体になるためには、特定非営利活動法人星のソムリエ機構 (以下、単に「機構」と呼ぶ) による審査を経て実施団体の認証を受ける必要があります。以下では、実施団体になるための条件や申請のポイントについて説明します。(申請用紙や具体的な記入方法についてはホームページをご覧ください。)

A.1.1 前提となる条件

本制度の導入を検討されている団体または個人は、自身が固有のミッション¹を持っていることを前提としています。皆さんのミッションを実現するための道具として本制度を利用していただきたいという思いでこの制度は設計されています。

本制度を導入して講座を開き、星のソムリエを養成することによって、幅広い人材を確保できることは間違いありません。毎年新しい仲間が増えていくことは本制度の魅力です。これは、二十年余りの実績が示すところ
です。

以上の前提条件ため以下のことが言えます：

- 資格を発行することを目的とした申請や単に星空案内人を養成することを目的とした申請は認められません²。
- 星空案内人の資格を取得した方の活動場所が準備されていない計画(申請)は承認されません。
- 実施団体は独自の「育てたい案内人像」を持つことが義務付けられています。(制度は一つですが、星空案内人の活動の目標は実施団体ごとに異なります。)
- 星空案内は継続的に不断に行われるものですから、講座開講の場所にある地域に拠点があることが条件になります。(申請する母団体が全国的に活動する団体であっても、実施団体の申請は一つの地域ごとに行う必要があります。)

詳しい解説が 1.2 にあります。

¹mission は使命、あるいは、目的の意味です。

²実施団体の関係者や従業員などの研修目的の講座開講ができないことは言うまでもありません。

A.1.2 基礎資料

星空案内人制度の仕組み、**実施団体の義務** など重要な事項は以下の三つの文書 (通称「三種の神器」) に定められているので熟読ください

- (1) 星空案内人制度運営規則
- (2) 講義要綱
- (3) (各科目の) 単位認定基準

これらは、本制度がどのようなものなのか、どのように資格認定されるか、といったことが誰でも確認できるよう制度のホームページに公開されています。

実務上の細かな点は上記の文書から読み取れないこともあると思います。制度のホームページには「実施団体の皆様へ」というサブページがあり、そこにある資料もお読みください。この文書も「**星空案内人制度 Tips**」として閲覧できます。

本制度は 10 年、20 年と長期にわたって使うことで絶大なる効果が現れる制度です。資格を発行しておしまいという軽いものではありません。卒業生の何人かは、10 年もすると実施団体を支える重要なメンバーになると思います。**効果の大きさに対応して制度は大掛かりなものですから、導入にもかなり入念な戦略と準備が必要です。**そのつもりでご検討ください。

A.1.3 重要な概念など

実際に講座を開いて星空案内人を養成するときの押さえておきたい重要なポイントをまとめました。

資格の名称

初心者が一気に「星空案内人」の資格を得るのは難しいので、2段階の資格になっています:

step-1 星空案内人 (準案内人)、

step-2 星空案内人

の二つです。() がついているのは条件付き、あるいは、限定条件ありという意味です。(準案内人) がついても「星空案内人」であることには変わりありません³。

「星のソムリエ[®]」は星空案内人の愛称で登録商標です。「星空案内人」の方も「星空案内人 (準案内人)」の方も「星のソムリエ[®]」です。商標の使い方については別の節で説明します。

「星空案内人」と「星空案内人 (準案内人)」の条件は制度規則をご覧ください。両者の大きな違いは「星空案内人」になるためには実技科目の単位認定 (実技試験) があることです。

「星空案内人 (準案内人)」にくらべて、「星空案内人」が優れているという見方にならないよう注意してください。実際、人数が圧倒的に多い「星空案内人 (準案内人)」の方が強力なパワーをもっています。

講座講師の選定など

各科目の講師は実施団体が独自の判断で選び 依頼してください。実施団体になるための申請の際に、予定講師のお名前や所属、実績などを書いていただきます。予定されている講師が適切かどうかは実施団体の認証の可否に影響します。

申請書にはその方が講師に相応しい理由を書く欄がありますので理由をしっかりと示してください。例えば、「宇宙はどんな世界」の科目の講

³例えば、自動車免許なら「普通自動車免許 (AT 限定)」が「星空案内人 (準案内人)」にあたり、条件のない「普通自動車免許」が「星空案内人」に対応していて、限定条件があっても、運転は可能というのと同じで、どちらも星空案内人です。

師の選定理由として「長年、星空案内の実績がある」や「アマチュア天文家として彗星を発見した」といったことを書くことはできません。この科目は天文学の講義ですから、天文学の知識が十分であるかどうかを記載する必要があります。同様に、各科目の内容をよく理解している人であることを示してください。各科目の内容は「講義要綱」に記載されていますのでそちらをご覧ください。

実施団体の承認を受けて、いよいよ講師に正式に依頼する時は、講師には(1) **講義要綱**、(2) 実施団体のみなさまへのページにある**講師への依頼文**、を渡してください。

2回目以降の講座で、講師を初回講座と変更することがあると思います。実施団体として承認された団体は適切な講師を選ぶ判断力があると考えていますので、講師の変更について機構の承認を得る必要はありません。

その他のポイント

- 通常、「星空案内人 (準案内人)」の資格取得を目標とした講座を第1ステップとして行います。ここでは、実技科目の講義は行いますが、実技科目に関わる練習と科目認定は行ないません。
- 講座の名称は実施団体の自由です。
- 各科目の講義時間は100分以上と規定されています。**100分は最低必要時間**です。講師の先生とも相談して講義要綱の内容を説明するときに十分な時間を設定してください。おそらく100分より長い時間をとるのが良いということになると思われます。長い講義では中間に休憩時間を設けるようにしましょう。
- 各科目の単位認定はホームページで公開されている認定基準に従ってください。実施団体独自の認定基準を用いて単位認定を行うことはできません。

実施団体が持つ固有の「育てたい案内人像」にあった認定基準がない場合は、独自の認定基準を設けることができます。その時は、どのような認定基準にしたいかを機構に提案してください。機構と協議の上、新しい認定基準ができた場合は、それを新しい基準として認め、制度のホームページに掲載します。その新しい基準で単位認定することができるようになります。

- 星空案内人(準案内人)の資格を取得後、十分な練習時間を持って、その後に実技科目の単位認定試験を実施するようにしましょう。その中で、限定なしの「星空案内人」が誕生します。これを二段ロケット方式と呼んでいます。

一段目	星空案内人(準案内人)までの講座 (実技練習・科目認定はまだしない)
切り離し	認定書授与式 (二段目に乗るかの自己決定)
二段目	星空案内人を目標に実技練習・科目認定

- － 申請書では実技科目の練習の場をどのように設けるか、どのように指導するか、受講生とのコミュニケーションをどうとるかなどの記載が求められます。
- － 限定なしの「星空案内人」の資格取得後どのように活動場所が提供されるかについても申請書に記載する必要がありますので十分に計画を練ってください。これは、養成された星空案内人が実施団体とどのように連携して活動するか、つまり、育てたい案内人像と深く関係しています。
- － 特に、実技科目の講義の後すぐに単位認定しないようにしてください。受講生のほとんどは初心者であり、実技練習の時間をしっかり確保することが重要です。
- 星空案内人養成に関する費用、受講料などについては制度規則では規定はありませんので、実施団体の自由です。

- 講座の時間割については、各科目の講義時間だけでなく以下のような時間を十分に確保してください：制度の説明、実施団体の紹介、実施団体の育てたい案内人像の説明、受講生間の交流、受講生と実施団体との交流など。観望会、懇親会なども効果的です。受講生は資格取得後には実施団体の活動に合流することを期待しています。
- 講座実施団体スタッフや講師、受講生などのあいだのコミュニケーションがうまくいかず、予想外のトラブルが発生することがあります。いち早く対応できるように、実施団体は苦情等の問い合わせ窓口を設けてください。この際、窓口はわかりやすいところに設置し、気軽に相談できるように工夫してください。「実施団体は、楽しく学べる講座のために最大限の努力をしていますが、至らない部分もありますので」などの但し書きをつけると良いかもしれません。
- 星のソムリエ[®]は登録商標です。使用する場合は機構から許諾を得る必要があります。ただし、実施団体が講座運営のために使用する場合と資格を持った星空案内人が自分を紹介するために使用する場合（たとえば、名刺に星のソムリエの肩書きを付ける）は許諾が不要です。詳しくは、ホームページにある商標使用のガイドラインをご覧ください。

制度の維持費用

星のソムリエ制度の全国展開が5団体で始まったのは2007年ですが、その後、増えて全国で50以上の団体が講座を開講して今後も増加が続くと思われます。多くの団体の活動を機構はサポートしています。また、今後の発展のため星のソムリエの知名度向上のさまざまな全国キャンペーンやイベントなどを機構は展開していきます。このような機構が行う制度持続活動の資金は実施団体みなさまからの援助で支えていただきたく実施団体へは参加費をお願いしています。詳しくは、2026年度より公開

される制度規則をご覧ください⁴。また、実施団体なるための申請の審査についても審査料を 2026 年度よりいただく予定です。

⁴2026 年度の参加費は 1 万円です